

平成二十六年十二月十日発行
皇學館論叢第四十七卷第六号
抜刷

正岡子規漢詩の考察

—— 中国古典の受容の様相 ——

張

文

宏

皇學館論叢 第四十七卷第六号
平成二十六年十二月十日

正岡子規漢詩の考察 — 中国古典の受容の様相 —

張 文 宏

□ 要 旨

正岡子規は生涯に二千首程度の漢詩を残している。それらのうちから自選して『漢詩稿』一冊を纏めている。これを対象に考察すると、中国古典を借用しながらみずからの漢詩作品を構築した例を見出すことができる。本稿では、それらの中から主要な作品を採り上げ、【典拠】とその【解釈】、また作品の【通釈】とを試みた。その結果、子規の中国文化に関する考え方の特色を析出しようとするものである。

□ キーワード

正岡子規 漢詩稿 中国古典の受容 子規の中国観

序

正岡子規（一八六七～一九〇二）は十二歳から漢詩を作つて以来、生涯で漢詩を二千首ほど世に残している。数多くの漢詩から自選して、自ら記録し直したものを綴じて残したのが「漢詩稿」一冊である。

ちなみに、陳生保著『森鷗外の漢詩』上（明治書院、平成五年六月）に拠れば、夏目漱石の漢詩二〇七首、森鷗外の漢詩二二四首がある（二八頁）。比較すれば、正岡子規の漢詩は二人の約一〇倍に相当するが、子規漢詩の研究は漱石、鷗外ほど盛んではないのである。

本稿では、講談社版『子規全集』第八卷（昭和五一年七月）所収の「漢詩稿」及びその書き下し文に基づき、子規の漢詩を考察対象に、中国古典文化を借用し自分の漢詩世界を彩った子規の歩みを辿りながら、子規の中国文化観を析出することを試みる。

まず十二歳頃、習作した五言絶句を取り挙げる。これが子規の最初の漢詩であるとみなされる。なおタイトルのあとの（ ）の内のM記号は、明治の略記を示す。

聞子規（M11） 子規を聞く

一声孤月下

一声 孤月の下

啼血不堪聞

啼血 聞くに堪へず

半夜空欹枕

半夜 空しく枕を^{そばだ}欹つ

古郷万里雲

古郷 万里の雲

この詩では承句に子規の咯血を重ね合わせ、結句についても、故郷の松山を思っているものと思われる。偶数句末の「聞・雲」が韻を踏むのは、言うまでもなく、難業とされる平仄の規則もきちんと守られている。少年子規の漢文の造詣に驚かされる。注意すべきは、「啼血」という言葉が少年子規の漢詩に初めて出たことである。それは子規自らが宿命的なものを予言していたのではないかとさえ、思わせられる。「杜鵑啼血」（杜鵑が血を啼く）という成語は果して子規の運命に秘められていたのか。

以下、本稿を四節に分け、各観点から作品の発表の年代順に、子規の漢詩を考察していこうと思う。本稿では1から11までは、中国典故・成語の原文を表す。子規漢詩のタイトルに○を付ける。なお子規漢詩が典故と一致する箇所は傍線を付けて表記する。

一、子規漢詩に見る中国典故・成語

1 孟母三遷 もうぼさんせん 孟母断機 もうぼだんき

○孟母断機（M14）

孟母 機を断つ

教育最思三変遷

教育 最も思ふ 三変遷

千秋万歳姓名伝

千秋万歳 姓名伝はる

正岡子規漢詩の考察（張）

一機繪帛絲千縷

一機の繪帛スサハ 糸千縷

散作七篇明道篇

散じて七篇の明道篇とする

○見学校女生有感（M14） 学校の女生を見て感あり

干戈全戢学斯文

干戈全て戢カンクワすべまりて斯文を学ぶ

黽勉只求才氣伸

黽勉して只求む 才氣の伸ぶるを

想像女兒成長後

想像す 女兒 成長の後

家家必見断機人

家々必見ん 断機の人を

【典拠】

① 劉向『列女伝』（漢）

孟母姓仇氏、孟子之母。夫死。狹子以居。三遷為教。及孟子稍長、就学而帰。母方織。問曰。学何所至矣。対曰。自若也。母憤因以刀断機。曰。子之廢学、猶吾之断斯機也。孟子惧。旦夕勤学。遂成聖。

② 『三字経』（作者未詳）

昔孟母、扞隣処。子不学、断機杼。

【典拠解釈】

典拠①と②は量的には違うが、内容的にはほぼ一致する。教育の環境が子供に及ぼす影響と、学問の大切さを、そ

れぞれ強調している。

孟子の母は仇を姓にする。夫が死んだ後、幼い孟子と暮らしている。その家が墓場の近くにあつて、孟子がいつも葬式のまねをして遊んでいたので、母は心配して市場のそばへ移った。今度は商売のまねばかりしているので、また心配して学校の近くへ転居した。今度は、礼儀作法など学習のまねごとをして遊ぶようになった。母は喜び、ここを居所に定めた。これは「孟母三遷」と言う。

孟子が少し大きくなつて、ある日、孟子が学問を怠つて家に帰つてくると、機織りをしていた母親は、織っていた織物を断ち切つて「学問を中途でやめるのは、私が織りかけの織物を断ち切るようなものだ」と戒めた。「孟母断機」という典故はこの話に由来する。

【漢詩通釈】

教育の話題というと、孟子の母が三回家を引っ越したことが思い出される。その美名は千秋万歳に伝わっている。孟母の織つたきれいな絹は、糸が細く長く引き垂れ、散じると（七色の絹の如く）教育について綴った七篇の名文に変わるだろう。

干戈が全ておさまると（平和になると）、これから知識を学ぶ時代に入る。努力してひたすらに才能を伸ばすことを求める。今日の女の子が大きくなつたら、孟母のような家庭教育を厳しくした人々を必ず見出すだろう。

○詠史 (M15)

詠史

昔日良姻今惡姻

昔日 良姻 今 惡姻

鶴岡堂裡翠眉顰

鶴ヶ岡堂裡 翠眉顰ひそむ

数声歌曲数行淚

数声の歌曲 数行の淚

想看当年虞美人

想ひ看る 当年の虞美人

【典拠】司馬遷『史記』卷七「項羽本記」(漢)

項王軍壁垓下、兵少食尽。漢軍及諸侯兵圍之数重。夜聞漢軍四面皆楚歌、項王乃大驚曰。漢皆已得楚乎？是何楚人之多也。項王則夜起、飲帳中。有美人名虞、常幸從。駿馬名騅、常騎之。於是項王乃悲歌慷慨、自為詩曰。力拔山兮氣盖世、時不利兮騅不逝。騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何。歌數闋、美人和之。項王泣數行下、左右皆泣、莫能仰視。

【典拠解説】

楚の項羽こううが漢の高祖(劉邦)(りゅうほう)の軍に垓下(がいか)（現、安徽省蚌埠市）で囲まれた。夜になって、城壁の回りを四方から囲む敵の漢軍の中の者が盛んに項羽の故郷である楚の地方の歌を歌う。それを聞いた項羽は、「漢軍はすっかりわが楚の地を手に入れてしまったのか、なんと楚の人が多いことよ」と言って、頼みにしていた本拠地もすでに漢に降伏した

のかと絶望した。形勢利あらずと悟った項羽は、別れの宴席を設けた。項羽には虞美人という愛妾がおり、虞美人との別れを惜しみ悲憤を詩に詠んだ。虞美人もこれに唱和し、項羽は涙を流し、臣下たちも皆涙を流した。後に虞美人は剣で自殺した。項羽は残る僅かな兵を連れて出陣し、囲みを破って南へ向かった。烏江という長江の渡し場に至って逃げるところもなく、自ら首を刎ねて死んだ。項羽の死によって「楚漢の争い」は幕を閉じ、劉邦は天下を統一して漢の王朝を開くのである。

【漢詩通釈】

昔の幸せな婚姻が今は悪くなってしまった。鶴ヶ岡堂の中では、美しい眉を顰めた女が夫を待っているのだろう。彼女は涙をこぼしながら小さな声で歌を歌っている。（今その様子を見て）往年の（楚王項羽と離別した）虞美人の運命が想像される。

3

桃園結義

○玄德桃園結義図（M15） 玄德 桃園に義を結ぶの図

九州々裡乱如麻 九州々裡 乱ること麻の如し

歃血英雄憂漢家 歃血して英雄 漢家を憂ふ

好是後園春爛漫 好し是れ後園 春 爛漫

丹心染出万桃花 丹心染め出す 万桃の花

正岡子規漢詩の考察（張）

【典拠】『三国志平話』卷二（元、作者未祥）

後有一桃園、園内有一小亭。飛遂邀二公、亭上置酒。三人歛飲。飲間、三人各序年甲…徳公最長、関公為次、飛最小。以此大者為兄、小者為弟。宰白馬祭天、殺烏牛祭地。不求同日生、只願同日死。三人同行同坐同眠。誓為兄弟。

【典拠解釈】

三国時代、劉備、関羽、張飛の三人が町の市場で出会った。この三人は互いに親しみ、一緒に酒を飲んだ後、張飛の屋敷の裏の桃園で、義兄弟となる誓いを結び、生死を共にする宣言を行った。徳公である劉備は年上だから、兄となり、次に関羽、張飛はその次の弟となる。馬と牛を殺してそれらで天地を祭る。この話は「桃園の誓い」とも呼ぶ。

典拠の中の「宰白馬祭天、殺烏牛祭地」は、「白い馬を殺しその血で天を祭り、黒い牛を殺し、その血で地を祭る」という意味である。子規はそうした典拠を受け入れ「敵血」という言葉にまとめた。「敵」は「少し飲む」という意味。だから「敵血」は「血を少し飲む」となる。古代の中国人は盟約を結ぶとき、誠心を表すために動物の血を舐める。それは「敵血」と呼ばれる。

【漢詩通釈】

九州の大地に麻の如く入り乱れた戦いが起こった。（いけにえの）血を注ぎ、それを互いにすすって誓った英雄たちは、漢の王朝の将来を心配する。ちょうど住まいの裏の桃園が春爛漫の季節に、（私たちの）真心は、万朶の桃花を染め出すのであろう。

蕭何月下追韓信

○題蕭何逐韓信圖（M 16）

蕭何^{セウカ}の韓信^{カンシン}を逐^おふの図に題す

天下知己幾人有

天下 知己^{チキ} 幾人か有る

英豪空斂回日手

英豪空しく斂^{をさ}む 回日の手

去項歸劉亦被棄

項を去り劉に歸せしも 亦棄てられ

單騎加鞭侵夜走

單騎 鞭を加へ 夜を侵して走る

胸裡韜畧無由用

胸裡の韜畧 用ふるに由無く

丈夫心中甚不平

丈夫の心中 甚だ平らかならず

竊嘆到処志不遂

竊^{ひそ}かに嘆^{なげ}ず 到る処 志遂げざるを

明主何事失其明

明主 何事ぞ 其の明を失へり

嬴秦喪鹿九土裂

嬴秦^{エイシン} 鹿を喪^{うしな}ひて九土裂けたり

宜及此時博大名

宜しく此の時に及んで大名を博すべし

若得擢用竭其力

若^もし擢用せられて其の力を竭^{つく}すを得ば

百戰汗馬不惜生

百戰汗馬 生を惜しまざらん

枯葉帶風片々墜

枯葉 風を帶^びびて 片々として墜ち

自疑背後追騎至

自^{みづか}ら疑ふ 背後に追騎至るか

何計漢軍知己在

何ぞ計らん 漢軍に知己在り

蕭相逐我來此地

蕭相我を逐つて此の地に来る

馬首復向漢中還

馬首復漢中に向かつて還り

爾後竟上真王位

爾後竟に眞の王位に上る

【典拠】司馬遷『史記』卷九二「淮陰侯列伝」（漢）

淮陰侯韓信者、淮陰人也。始為布衣時、貧無行、不得推擇為吏。又不能治生商賈、常從人寄食飲。（中略）漢王之入蜀、信亡楚歸漢、未得知名。（中略）上拜以為治粟都尉。上未之奇也。信數与蕭何語、何奇之。至南鄭、諸將行道亡者數十人。信度何等已數言上、上不我用、即亡。何聞信亡、不及以聞、自追之。人有言上曰、丞相何亡。上大怒、如失左右手。居一二日、何來謁上。上且怒且喜、罵何曰、若亡、何也。何曰、臣不敢亡也。臣追亡者。上曰、若所追者誰。何曰、韓信也。上復罵曰、諸將亡者以十數、公無所追、追信詐也。何曰、諸將易得耳、至如信者、國土無双、王必欲長王漢中、無所事信、必欲爭天下、非信無所与計事者、顧王策安所決耳。王曰、吾亦欲東耳、安能鬱鬱久居此乎。何曰、王計必欲東、能用信。信即留、不能用、信終亡耳。王曰、吾為公以為將。何曰、雖為將、信必不留。王曰、以為大將。何曰、幸甚。（後略）

【典拠解釈】

後に淮陰侯となった韓信は、もともと淮陰（現、江蘇省淮安市）出身の人である。当初一平民だった頃には、貧しくて品行が悪かったために、役人に推挙してもらえなかった。また、商売をして生計を立てることもできず、いつも人に食べさせてもらっていた。（中略）漢王（劉邦）が蜀の地に入った時、韓信は楚から逃亡して漢に帰属したが、

名を知られるには至らなかつた。(中略) 漢王の劉邦は、韓信に治粟都尉の位を授けた。しかしその才能に興味を示したわけではなかつた。韓信はしばしば蕭何と話し合い、蕭何は韓信の才能を評価した。南鄭の地に到着する頃には劉邦麾下の將軍で同行した者の内、逃亡した者が数十人いた。韓信は、蕭何らが既に幾度も推挙してもらえないのに、漢王は自分を抜擢してくれないとわかつて、逃亡した。蕭何は韓信が逃亡したと聞くや否や、漢王に報告もせぬまま、自ら韓信を追つた。このことを漢王に報告する者があり、「丞相の蕭何が逃亡いたしました」と報告した。漢王は大いに怒つた。一日二日すると蕭何は戻つてきて漢王にお目通りした。漢王は怒り且つ喜んで蕭何を怒鳴りつけ、「お前が逃亡するとはどういうわけだ」と言つた。蕭何は、「私は畏れ多くも逃亡などいたしません。私は逃亡者を追つていたので」と言つた。漢王は、「お前が追つていたというのは誰だ」と言つた。蕭何は、「韓信です」と言つた。漢王は再び怒鳴りつけて言つた、「將軍たちで逃亡した者は多いが、あなたは(それらを)追わなかつた。韓信を追つたというのは嘘だ」と。蕭何は言つた、「他の將軍たちはいくらでも獲得できますが、韓信のような人物は国家的な人材で、二人とはおりません。漢王様が漢中の地でずっと王でありたいというなら、韓信を使わなくてもいいです。どうしても天下を争いたいというなら、韓信以外に共に計略の為に使う人物はおりません。王の今後の作戦について考えますに、どこでそれを決めるのでしょうか」と。漢王は言つた、「私もやはり東方の地が欲しい。どうしてこんな所に鬱鬱として長く留まつておられようか」と。蕭何は言つた、「王様がどうしても東方支配をお望みなら、韓信をお使いになることが必要です。韓信はすぐにこの地に残りましょう。お使いになることが出来ないなら、韓信は結局逃亡します」と。漢王は「私は貴公の意見を納れて韓信を將軍にしよう」と言つた。蕭何は言つた。「將軍にしてやっても、韓信は決して残りますまい」と。漢王はそこで「大將にしよう」と言うと、蕭何は「かたじけのない存じます」と言つた。(後略)

子規は典拠の「亡楚帰漢」を「去項帰劉」に変更した。典拠では、「上曰、若所追者誰。何曰、韓信也」は、日本語で訳すれば「漢王の劉邦は、あなたは誰を追って行ったのかと聞いた。蕭何は、韓信を追ってきましたと答えた」。それは子規の「追騎」「蕭相逐我」と一致している。また「馬首復向漢中還」の「漢中」は地名で、現在、陝西省の西南部にある。そこは古代から経済的に豊かなところとして知られている。二一九年に劉邦は漢中を占めて漢中郡と名付けて以来、そこは漢王朝の発祥地と見なされる。

【漢詩通釈】

天下ではわが志向を知る人が何人あるのか？英豪と言われた韓信は空しく悲しさをおさえ、時勢を一変する腕（を持つても役立たないと思っている）。彼は項羽を離れ漢王の劉邦に帰ったが、また捨てられるように重視されない。だから夜、馬に乗って鞭を加えて（劉邦の軍隊から）逃げ出した。韓信は心のうちで兵法を持っているが、それを用いるところがない。そして勇ましい男子としての韓信は甚だしく不平を言い、到るところで志を遂げていないと、ひそかに嘆いている。明主はいつたい何事のためにその賢明さを失ったのか？秦の始皇帝嬴政が開いた王朝は国土を失って潰れてしまった。このいい機会を借りて大きな名を博するべきである。もし（明主から）採用されたら命を惜しまずに全力を尽して戦うのだ。枯れ葉が風を帯びて片々として落ちる。韓信は、背後から騎馬が追いついたのに気付く、漢の軍隊がどうして私の行方がわかったのかと自らを疑った。そして（劉邦の重臣）蕭何が私を追いかけてここに来たのだと知った。それで、（韓信は）馬の首を引いてまた漢中郡に向かって帰った。

○詠史 (M 17)

畢竟祖龍謀太拙

畢竟 祖龍 謀 はなは 太だ拙なり

興秦未了又凶秦

秦を興して未だ了レウせざる 又 秦を亡ぼす

当年知否燒書日

当年 知るや否や書を焼く日

煽起炎劉火德新

炎劉を煽起して火徳新たならしめしを

【典拠】孔安国『尚書』序 (漢)

及秦始皇滅先代典籍、焚書坑儒、天下学士逃難解散。

【典拠解釈】

秦の始皇帝が書籍を焼き、儒者を穴埋めにした反文化的大暴政を、「焚書坑儒」と言う。始皇帝が自己の政策に有害として、即位の三四年（紀元前二三三年）に、丞相の李斯の勧めによって『詩経』『書経』などの儒家の経典を焼き、翌年に咸陽（現、陝西省西安市）で、儒者四六〇余人を穴埋めにした。

【漢詩通釈】

秦の始皇帝はもとより謀略がとても拙い。彼は秦を興したが、間もなく秦を滅ぼしてしまった。儒家の書籍を焼い

た当時に、劉邦が炎を煽ることが徳新となるか否かは、誰もが知らなかった。

6 三顧茅廬

○玄德訪孔明草廬図（M17） 玄德 孔明の草廬を訪ふの図

三分天下乱茫茫 天下を三分して 乱ること茫々たり

野有遺賢深自蔵 野に遺賢有り 深く自ら蔵る

一路隆中応非遠 一路 隆中 応に遠きにあらざるべく

馬頭山水不尋常 馬頭の山水も尋常ならず

【典拠】陳寿『三国志』（晋）所収「出師表」

臣亮言。先帝創業未半、而中道崩殂、今天下三分。益州疲弊、此誠危急存亡秋也。（中略）臣本布衣、躬耕於南陽。

苟全性命於乱世、不求聞達於諸侯。先帝不以臣卑鄙、猥自枉屈、三顧臣草廬之中、諮臣以當世之事。由是感激、遂許先帝以驅馳。（後略）

【典拠解説】

「出師の表」とは、三国時代、蜀の丞相諸葛亮（孔明）が二二七年出陣に際し、後主劉禪に奉じた上表文。先主劉備の遺徳を高めるように説いたもので、誠忠の情あふれた名文として有名である。

臣下の諸葛亮は言う。先帝劉備は国を興し、志半ばにして、途中で崩御してしまった。今、天下は三分し、益州は潰れそうになる。これは誠に危険な存亡の秋となった。私は元々庶民で、南陽という地で畑仕事をしていた。苟しくも性命を乱世に全し、聞達を諸侯に求めない。先帝は、臣の卑鄙なることを気にせず、自ら枉屈し、私の草廬を三度尋ねてやっと面会し、天下を治める策を話し合った。これより感激しており、遂に先帝について宰相として蜀の国に奉仕する。

『三国志』では、劉備が三回諸葛亮の草廬を訪ねて隆中で初めて対面したことはよく知られている。このときは、諸葛亮が荊州および益州を攻略して地位を固め、呉の孫権と手を結んで魏の曹操に対抗すべきと説いている。成語「三顧茅廬」は諸葛亮「出師の表」の「三顧臣草廬之中」という句に拠る。

【漢詩通釈】

天下を三分して戦乱が起こり茫々とした状況の中で、世間から忘れられた賢人である諸葛亮が隆中（現、湖北省襄陽市）に隠居していた。隆中までは遠くないが、ここの山水の風景は尋常ではない。

7 赤壁之戦

○前赤壁画（M17）

前赤壁の画

白露横江赤壁秋

白露 江に横たはる 赤壁の秋

清風明月作遨遊

清風明月 遨遊を作す

正岡子規漢詩の考察（張）

舳艫千里今安在

舳艫千里 今安くにか在る

不及風流一葉舟

及ばず 風流 一葉の舟に

【典拠】陳寿『三国志』（晋）

先主遣諸葛亮自結於孫權、權遣周瑜、程普等水軍数万、与先主併力、与曹公戰於赤壁。大破之。焚其舟船。

【典拠解釈】

「赤壁の戦い」とは、中国の後漢末期の二〇八年に揚子江の赤壁において起こった曹操の軍隊と孫權・劉備の連合軍の間の戦いである。

先主だった劉備は、孫權の軍隊と連合するために諸葛亮を派遣した。孫權は大将周瑜・程普らを派遣し、力を合わせ、赤壁で曹操を大いに破り、曹操の軍船を燃やした。それはまさに典拠の「焚其舟船」のとおりである。子規は「舳艫千里今安在」という句で、焼かれた曹操の軍船の様子を描いたのである。

【漢詩通釈】

白露が江に横たわる秋頃、赤壁の戦いを思い出す。清らかな風と明るい月が天空へ昇っている。昔、赤壁に千里ほど並んでいた軍船は、今どこにあるのか。それはあっても、風流な一葉の舟に及ばないだろう。

8 烽火戲諸侯

○遊寄席（M18）

寄席よせに遊ぶ

不絶如絲口便々

絶えざること糸の如く 口 便々たり

三寸舌頭世情穿

三寸の舌頭 世情を穿つ

半言隻句皆解頤

半言隻句に 皆 頤わどかひを解き

楼上如震人喧然

楼上震ふが如く 人喧然クラシたり

当年若使褒姒聽

当年も若し褒姒ハウジをして聴かしむれば

一笑何用百狼煙

一笑 何ぞ用ひん 百の狼煙を

【典拠】司馬遷『史記』卷四「周本紀」（漢）

褒姒ハウジ不好笑、幽王欲其笑万方、故不笑。幽王为烽燧大鼓、有寇至则举烽火。諸侯悉至、至而无寇、褒姒乃大笑。幽王説之、为数举烽火。其後不信、諸侯益亦不至。

【典拠解説】

褒姒ほうじは西周の幽王ゆうおうの妃である。彼女は養父が殺されたことを聞いて恨み、幽王の寵愛を極めた暮らしでも、十年ほど笑顔を見せることがなかった。幽王は「誰か褒姒を笑わせることができるなら、黄金千両を与える」という命令を下した。ある大臣が「烽火で諸侯と戯む」と提案した。古代、烽火台は軍事情報を伝えるものとして重要な防御施設

正岡子規漢詩の考察（張）

である。幽王は褒姒と驪山に遊んでいる時、烽火をあげる。諸侯が兵馬を率いて駆けつけ、幽王に何事もないことを知りむなしく戻って行った。この様子を見た褒姒が笑いを漏らすと幽王は大喜びした。後に敵が侵入し、幽王は烽火をあげたが、諸侯は前例があるから集まらず、幽王は殺されてしまった。

【漢詩通釈】

演芸の人が糸を垂れるように絶えず喋って、三寸の舌で世情の諸相を揶揄した。彼らはわかりやすくユーモアな言葉で皆を笑わせる。興行場の楼上が震える如く、聞く人が賑やかになっている。もし当年の褒姒はこの演芸を見れば、笑い出すに違いない。烽火の煙を使う必要があるものか。

9

囊螢映雪 のうけいせいせき
蓬頭垢面 ほうとうくめん

○病中作 (M22)

病中の作

蓼虫曾聽遂忘辛	蓼虫も 曾て聴く遂には辛を忘ると
多病慣痾催興頻	多病 痾に慣れて興を催すこと頻りなり
褥裡恰宜伴黃卷	褥裡 恰も宜し 黃卷を伴ふに
枕辺却喜遠紅塵	枕辺 却つて喜ぶ紅塵に遠ざかるを
未だ窓雪囊螢業	未だ成らず 窓雪囊螢の業
且作蓬頭垢面人	且く作る 蓬頭垢面の人と

鏡影自驚吟骨瘦

鏡影 自ら驚く 吟骨の瘦せたるに

笑言白鶴是前身

笑つて言ふ 白鶴ぞ 是れ前身と

【典拠】

① 李翰『蒙求』(唐)

孫康映雪 車胤聚螢

② 魏収『魏書』「封軌伝」(北齊)

君子正其衣冠、尊其瞻視、何必蓬頭垢面、然後為賢？

【典拠解釈】

①の上句、晋の孫康は雪明かりで読書した。下句、晋の車胤は螢を袋に集めて読書した。両方とも苦学の話である。二人は灯油を買えないほど家が貧しいが、しっかりと勉強して後に出世した。

②の「蓬頭垢面」とは、蓬のようにもじやもじやに乱れた頭髮と、垢がついてすっかり汚れきった顔。『魏書』中の「封軌伝」にこのような話がある。北魏頃、封軌という人がいる。彼は正直で教養があるだけではなく、おしゃれも好きな人である。だが、身嗜みが整わない文人に言われて、彼はこう答えた。「教養人というのは、衣や冠の整い具合を大切にすべきだ。だから蓬頭垢面の姿をしている者は、どうして賢人であると言えるか」。

【漢詩通釈】

嘗て蓼虫の声を聞き、遂に辛いことを忘れた。多病で治りにくい病に慣れたが、頻りに興しを催促されるようである。私は病床の布団の中でちょうど書籍を伴い眠り、枕のもとで紅塵に遠ざかることを喜んでいる。晋の孫康・車胤のような「囊螢映雪」の業績を遂げていないが、いちおう蓬頭垢面の人と成すだろうか。鏡に映った影を見て自ら驚きながら、骨まで痩せたことを嘆いた。「白鶴が私の前世の身ですよ」と笑って言った。

10 病人膏肓
びやうにゆうこう

○寒園（M28）

医薬固無効

病根入膏肓

今日儉余命

明朝且茫茫

医薬 固より効無く

病根 膏肓カウキョウに入れり

今日 余命を儉ぬすむも

明朝 且またに茫々たらんとす

【典拠】左丘明『左伝』「成公十年」（春秋）

疾不可為也。在膏之上、肓之下、攻之不可、達之不及、藥不至焉、不可為也。

【典故解釈】

春秋時代、晋の景公が病氣になり、秦の国の名医に診てもらおうと、派遣を依頼した。秦の桓公は緩といふ医師を遣わして治療に当らせることにした。緩がまだ着かないうちに、景公は、病氣が二人の童子となつて話し合う夢を見た。一人が「緩は名医だから、こちらがやられそうだ。どこに隠れよう」と言うと、もう一人は「膏（心臓）の下、膏（横隔膜）の上になれば大丈夫だよ」と言つた。医者は着くなり、「この病氣は治療できません。膏（心臓）の下、膏（横隔膜）の上の病位は、灸も使えませんし、針も届きません。薬も効きませんので、治療はできません」と言つたので、景公は「名医である」と言つて、お礼をして秦に帰らせた。数ヵ月後、景公は亡くなつた。

成語「病入膏肓」は『左伝』に拠るものであるが、子規はほとんど成語のまま韻を踏むように一字を入れて「病根入膏肓」と書いた。

【漢詩通釈】

医者とは固より効かない。病根がもう心臓の下、横隔膜の上に入り込んだわけだ。今日は、余命がかすかに残るが、明朝は、まさに茫々としてその回復は判別できない。

11 三十而立 四十不惑

さんじゅうじりつ よんじゅうふわく

○新年書懷寄某（M29） 新年 懷を書して 某に寄す

君家有積善 君が家 積善有り

正岡子規漢詩の考察（張）

吾家有陰徳

吾が家 陰徳有り

孜孜副所期

孜孜として期する所に副へば

家名自是得

家名 是れより得ん

三十而吾立

三十にして 吾立つ

四十君不惑

四十にして 君惑はず

【典拠】『論語』為政篇

子曰。吾十有五而志于学、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩。

【典拠解釈】

孔子が云う。「私は十五才で（学問の道に入ろうと）決めた。三十才で（学問に対する自分なりの基礎）を確立した。四十才で戸惑うことがなくなった。五十才で天命を悟った。六十で何を聞いても動じなくなった。七十になつてからは、心のおもむくままに行動しても、道理に違ふことがなくなった」と。

【漢詩通釈】

君の家には積善があれば、わが家には陰徳がある。孜孜として目標を目指し、これから一家の名声を揚げるようになる。三十才で（人生の目標）を確立し、四十才で戸惑うことがなくなる。

二、子規漢詩に見る中国古代の詩人

随筆集『筆まかせ』（明治二年）第一編において「書目十種」と題して、子規は愛読書を数えながら、漢詩では白居易の「長恨歌」や「琵琶行」を挙げている。明治二八年春、子規は『杜工部集』を読んだ後、「秋興八首」「石壕吏」「新婚別」など三〇首を『竹乃里歌』（明治三年）に収めた。それに杜甫の「三吏三別」を模倣し、「寒園」「寒蘆」「寒厨」即ち「三寒」という長編の漢詩を作り出した。子規は、特に李白と月の伝説に関心を寄せたらしく「養老の月を李白にのませはや」という句を残している。そのほかに、王維、蘇軾、陸遊、韓愈などの詩も愛読した。「頼山陽詩鈔後」に「山陽は神国の一東坡」の語があるのは、蘇東坡を最も推尊していた一人であることを示す。また当時の書き抜き帳「雜記」第三号に「東坡詩句拔萃」と「陸放翁詩句拔萃」が記録されている。

子規はそれらの詩人の作品を愛読し模倣するにとどまらなかった。さらに中国詩人の性格や運命を自分の心境と交織させ、何かを表したのである。ここでは中国古代の有名な詩人に関する子規の漢詩を取りあげ、その意味を通釈してみる。傍線部の箇所は中国詩人の名前あるいはそれに関係するものを示す。

○武陵桃源（M17）

武陵桃源

鶏犬数間屋

鶏犬 数間の屋

衣裳似外人

衣裳 外人に似たり

桃花別天地

桃花 別天地

不識晋邪秦

識らず 晋か秦か

【漢詩通釈】

広い家に鶏と犬がいる。そこに住んでいる陶淵明は、変な服を着ている。その地は桃の花に囲まれて、世の中とは別天地である。だから、桃の花の郷にいる陶淵明は、今は、晋の時代か、秦の時代かは、わからないのだ。

○酔李白（M18）

満斟芙蓉殿上筵

満斟す 芙蓉殿上の筵

笑揮醉筆坐君前

笑つて醉筆を揮ひ君前に坐す

数行澆出磊塊氣

数行澆出す 磊塊の氣

疑は銀河落九天

疑ふらくは是れ銀河の九天より落つるかと

【漢詩通釈】

李白は、唐玄宗の主催した宴会に誘われて、芙蓉という美酒をいっぱい飲んだ。彼は少し酔い、笑いながら筆を揮って唐玄宗の前で詩を作った。詩の字間に逞しい気魄が溢れている。あたかも天の川が天空より落ちてくるかのようである。

また結句「疑は銀河落九天」は、李白の詩がそのまま引用された。その詩を以下のように掲げる。

▽望廬山瀑布（李白）

廬山の瀑布を望む

日照香爐生紫煙

日は香爐を照らして 紫煙を生ず

遙看瀑布挂前川

遙かに看る瀑布の 前川に挂かるを

飛流直下三千尺

飛流直下 三千尺

疑是銀河落九天

疑ふらくは是銀河の 九天より落つるかと

○感懷（M19）

老大飄零志未成

老大して飄零し 志未だ成らず

江湖何処寄殘生

江湖 何れの処にか 殘生を寄せん

遼東落日烽烟絶

遼東の落日 烽烟絶え

台北浮雲殺氣横

台北の浮雲 殺氣横たはる

憂国少陵空病肺

憂国の少陵 空しく肺を病み

多情杜牧尚談兵

多情の杜牧 尚 兵を談ず

枕戈死難將軍在

戈を枕にして難に死するの將軍は在るも

樽俎誰能開泰平

樽俎^{そんそ}もて誰か能く 泰平を開かん

【漢詩通釈】

私は年をとったが、まだ落ち着かない状態で、志を遂げていない。広い世の中、一体、どこで余生を過ごすのか。

正岡子規漢詩の考察（張）

遼東の落日に日清戦争の砲煙が消えた。台北の浮雲に殺気が横たわっている。憂国の杜甫（号は少陵）は空しく肺病にかかっている。一方で多情の杜牧はなお兵士の話を詩吟にする。兵器を枕にして戦争で死んだ兵士は多いが、將軍はまだ生きている。樽俎を持つ將軍たちは誰が一体平和の世界を創れるのか。

以上の三首の漢詩には、隠居し田園生活を送った陶淵明、権力に屈服せず多才で気ままの李白、憂国の杜甫、豪放且つ多情な杜牧、それぞれの個性が窺える。子規はこの四詩人の特徴を、自らの思いと融合させて巧みに漢詩に織り込んだのである。ここには、中国詩人の多才に負けまいとする子規のプライドが見え隠れすると同時に、多病で自らの志を果たせない残念な気持ちも看取される。

三、子規における莊子の受容

莊子の思想は無為・自然を基本とし、人為を嫌うものであり、俗世間を離れ無為の世界に遊ぶ姿勢で展開される。その思想を表す説話として「蝶の夢」がある。「莊周が夢を見て蝶になり、蝶として大いに楽しんだところ、夢が覚める。果たして莊周が夢を見て蝶になったのか、あるいは蝶が夢を見て莊周になっているのか」という。

上京後の子規は（莊子）の講義を聞いて莊子の思想に興味を示したらしい。次に、「漢詩稿」から莊子に関連する漢詩を抜き出し、その該当箇所に傍線を附す。

○莊子蝶夢図（M15）

莊子蝶夢の図

談虚平素絶塵声

虚を談じて平素より塵声を絶つ

不羨貴人軒冕榮

貴人軒冕の榮を羨まず

化蝶夢魂貪喜樂

蝶に化し 夢魂 喜樂を貪る

莊周畢竟是多情

莊周 畢竟 是れ多情

【漢詩通釈】

莊子（莊周とも言う）はもとより《虚》を提唱し、世間の俗事を断つ。彼は権力者と金持ちのことを羨ましがらない。ある日、莊子は自分が蝶と変身して花の中で楽しく遊んでいるのを夢見た。彼はつまるところ実に多情の人なのである。

○題小説後似著者某（M 20）

小説の後に題して 著者某に似す

夢中書就事尤奇

夢中に書の就る 事 尤も奇なり

仮説寓言写所思

仮説寓言もて 思ふ所を写す

彩筆生花真可羨

彩筆 花を生ず 真に羨むべく

虚心化蝶亦徒為

虚心 蝶に化す 亦徒為ならんや

秀英才子麒麟種

秀英の才子 麒麟の種

窈窕佳人桃李姿

窈窕たる佳人 桃李の姿

卷里名流一堂会

卷里の名流 一堂に会し

共攄胸臆是何時

共に胸臆を攄ぶるは 是れ何れの時ぞ

正岡子規漢詩の考察（張）

【漢詩通釈】

夢の中で書いた事は最もおかしい。仮説と寓言を借りて自分の言いたい事を書いている。李白は、使っている筆の先に花が出てきたという夢を見てから、立派な詩歌が作れるようになったという。それは本当に羨ましい。莊子は虚しく蝶と変身して到底何もできないのだ。すぐれた才子は麒麟の種のように注目され、美しくしとやかな美人は桃の花のように好かれる。書籍の中には有名人が一堂に集まっているが、いつ頃、皆で共に思いを述べて胸の中を発散させようか。

○偶成（M22）

嘗来世事幾甘辛

嬉笑常稀感慨頻

六歲歸鄉民變俗

十旬臥病硯留塵

為周為蝶夢中夢

作仙作仙人外人

開悟煉形別無術

蝸蘆靜坐好安身

世事を嘗め来ること 幾甘辛

嬉笑 常に稀にして感慨頻りなり

六歲 郷に帰れば 民 俗を變じ

十旬 病に臥せば 硯 塵を留む

周と為り蝶と為る 夢中の夢

仙を作りつく仙人と作し 人外の人

悟りを開き形を煉るも 別に術無し

蝸カワ蘆ロに靜坐して 好く身を安んぜん

【漢詩通釈】

世の中で、幾つかの楽しさと辛さを味わいながら生きている。たまには笑い戯れることもあるが、人生に嘆くこともよく聞こえてくる。私は六歳頃ふるさとに帰ると、地元の人が俗事を変えることに気づいた。しかし、私は十年間病氣にかかっているので、文章を書くことができずに、硯に埃が溜まっている。そして、いつも莊周となり、蝶となることを夢見る。また人間世界を脱して仏となり仙人ともなりたい。それに悟りを開き心を磨きたいが、残念ながら、道術が全くわからない。だから、私は蝸牛のように小屋に静座して、身を安住させることを好しとする。

○送夏目漱石之伊予（M 29） 夏目漱石の伊予に之くを送る

去矣三千里

去けよ三千里

送君生暮寒

君を送れば暮寒生ず

空中懸大岳

空中に大岳懸かり

海末起長瀾

海の末に長瀾起こる

僻地交遊少

僻地交遊少なく

狡兒教化難

狡兒教化難からん

清明期再会

清明に再会を期す

莫後晚花残

後るる莫かれ晩花の残らんとするに

【漢詩通釈】

君はこれから遙かなところへ行く。君を見送ると夕暮れの寒さが募る。その時、空の中に大山が懸かり、海の辺に大波が起こった。君の行くところは辺鄙で交友も少ないし、クソガキを教え導くこともなかなか難しい。清明に私たちが再会するのを楽しみにする。間もなく春の花が散ってしまふ。（それに遅れることなく、早く、ここを去りなさい。）

明治二九年の正月、漱石が伊予の松山で英語教師をしていた頃、東京に帰省し、また松山に戻っていく。これは子規が新橋駅で見送った詩である。友人に対する温かな気持ちが溢れている。「去矣三千里」は『莊子』「逍遙遊」篇の「水擊三千里」を踏襲すると思われる。

四、漢詩に見られる子規の中国文化観——まとめ

子規の中国文化観を考える前に、彼の典拠となった中国古典を改めて確かめる。本稿第一節で確認したように、その中国関連のものは『史記』『三國志』『尚書』『蒙求』『魏書』『左伝』『論語』『列女伝』に拠るものである。

また松山中学で子規は漢文学の勉強をしっかりとしていた。渡部勝己氏は『子規全集』第八卷（前出）の「解題」（六八四頁）において松井（俊明）から『文章規範』『左伝』の講義を受け同時に、「八大家や近思録の講義を聞き、或は四書の何かを論講して、討論をやった」という三並良の証言を紹介している。当時の松山中学の講義を通して、子規は「四書五経」や「二十四史」のような經典を読んでいたことがわかる。

本稿では、「漢詩稿」に収録された子規漢詩を中心に考察してきた。彼の中国文化観をまとめてみると、およそ以下のようなになる。

第一に、子規は儒家思想の書籍を大量に読み、正統的且つ教訓的な典故を愛用するのである。例えば「孟母三遷」「孟母斷機」「囊螢映雪」「三十而立、四十不惑」など、学問を勧め人生を励む名句である。こうした中国典故は、教育を重視し出世意識が強かった明治社会の現状にふさわしいと考えられる。

第二に、子規は少年時代から儒家思想の影響を受けながら、莊子の思想をも受容した。だが、量的には、儒家の書籍に取材した漢詩は多かった。一方で、莊子とその思想に関わる漢詩は殆ど病弱で臥床した時期に集まったと言える。それは、李白などの中国文人の歩んできた道と同様ではないか。つまり、彼らは不遇あるいは病弱などの原因で立身出世の人生観につながる儒家思想から次第に無為隱遁の道家思想へと変わった。それは中国古代のインテリ階層の宿命的な軌跡でもある。当時の子規の中国思想への関心には、そうした思想的な軌跡を辿ることができる。

第三に、子規は『三国志』『史記』などの歴史の書籍を愛読するだけではなく、李白、杜甫、王維などの大詩人にも大きな関心を寄せた。彼は自分の憧れた中国詩人に学び、政治的思想的なものを避けて、「三顧茅廬」「赤壁之戦」などの歴史事件を通して叙事的叙情的なものを詠んでいたのである。したがって思想よりも抒情を大切にしたところに子規漢詩の特徴が見られる。それは白居易や王維などの文芸観に通底しているのではないかと思われる。

なお、子規の俳句にも漢文学の影響があるが、それについては、さらに今後の課題としたい。

〔付記〕正岡子規の漢詩は『子規全集』第八卷（講談社、昭和五一年七月）に拠った。但し、原則として旧字体を新字体に改めた。

また本稿の【典拠解釈】は、加藤常賢・水上静夫著『中国故事成語辞典』新訂版（角川書店、昭和五七年一月）と、『新釈漢文大系 第58巻 蒙求』（明治書院、昭和四八年八月）を参考にした。なお、本稿は平成二六年四月から九月まで、筆者が皇學館大学に客員研究員として滞在したときの研究成果の一部である。帰国にあたり、同年九月二六日（金曜日）、研究報告

会を催して頂いた。その際に各先生方より貴重な示唆、ご意見を頂き、本稿を成すことができた。報告会の御世話をしてくださった研究開発推進センター・副センター長の荊木美行教授をはじめ諸先生方に厚く御礼申し上げます。

（ちょう　ぶんこう・河南師範大学教授）